
藤子ストーリーズ

ぱわっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤子ストーリーズ

【Nコード】

N1722E

【作者名】

ばわっち

【あらすじ】

時は2008年、平和な日本に黒い影が迫る。それを止められるのは彼らしかいない。ドラえもん、パーマン、エスパ―魔美などの藤子キャラが活躍する、S!!すこし、F!!不思議な、ファンタジー小説です。今こそ立ち上げろ！藤子の戦士達よ！！

第一話「私はエスパー」

2008年8月16日（土曜日）

「高畑さん！いったわよおー！」

高畑と言われた少し小太り気味の少年が両手を上げてキャッチの体勢に入る。

「ゴン！」

しかしボールは高畑の右腕と左腕の間にうまく落ちてしまい、おでこでキャッチする形となった。

「フニヤハハハハハ」

ベンチの上でその光景を見ていた犬（実際には狸や狐みたいにも見える）が大声で笑い出す。

「笑い事じゃないでしょコンポコ！」

ノックを打った赤毛の女の子に言われてコンポコと呼ばれた犬は黙りこけてしまった。

「大丈夫？高畑さん？」

赤毛の女の子は心配そうに倒れている高畑の所に駆け寄る。

「うーん・・・」

高畑は最初気を失いかけていたが女の子がこちらに走ってくるのを見て

目が覚めた。

「大丈夫だよ魔美くん」

とやせ我慢してみせたが魔美と呼ばれた女の子は

「こんなに腫れて大丈夫なわけないでしょ！今家から救急箱持ってくるから少し待ってて」

と言って胸にあったハート形のブローチ（スプリングでボタンを押

すと中からビーズがでるように改造してある）の先端を自分の方へ向け、ボタンを押してビーズを飛ばした次の瞬間、なんと魔美は消えてしまったのである。

実は魔美はエスパーでテレキネシスやテレポーテーションなどの超能力が使えるのだ。

今使ったのはテレポーテーションである。（ただしテレポーテーションするにはビーズなどの

物体を自分に当てなければならぬ）

高畑は自力で何とかベンチに戻り魔美がくるのをコンポコと一緒に待っていた

「まったく魔美くんたらあれほど人前で超能力を使うなっていったのに・・・」

魔美がエスパーだと知っているのは高畑だけである。

「おまたせ」

魔美が救急箱を持ってきた。

幸い高畑の怪我は大したことなく、ボールが当たったところが少し腫れているだけだった。

「痛たたた・・・」

魔美が高畑のおでこに消毒液をかける。

「我慢なさいよ、このくらいの傷」

・
・
・
・
・

「よし！治ったわよ」

手当てが終わわり、高畑のおでこにはクマのバンソウコウが貼ってある。

「恥ずかしいよ！魔美くん」

高畑は顔を真っ赤にして言った。

「あら、かわいくていいじゃない」

と魔美は高畑をからかうように言った。

それを見ていたコンポコは

「フニヤハハハハハ」

と腹を抱えるようにして大声で笑う。

「こらーコンポコ笑うな〜！」

高畑に言われて笑いをこらえるコンポコだが、まだクスクスと笑っている。

「さあ〜怪我也大したことないし、そろそろ練習再開といきますか〜」

「え〜、まだやるの〜？もう3時間も練習しているんだよ？」

魔美の言葉に少し反論気味の高畑。

「当たり前でしょ。試合はもう来週に迫ってきているのよ、ここでごんばらないと意味がないじゃない！」と魔美は強めに言った。

高畑は魔美の学校の同級生で野球部である。しかし野球はそれほど上手くなく、たまに練習試合で出してもらっているが、公式試合にはまだ出してもらったことがない。しかし試合の1週間前に仲間の部員が怪我をしまい、急遽高畑が出ることになったのだ。そんな高畑を見た魔美は少し離れた河原のグラウンドでいっしょに野球の特訓をする事になったのである。

「わかつたよ魔美くん」

高畑は渋々言う。

「守備練習はもう大丈夫だと思うから次は打撃練習にしましょう」

「本当かい？僕は打撃の方が自信あるんだ〜」

高畑が嬉しそうに言う。

「あら〜こんな事初めて聞いたけど〜？」

魔美が疑い深く聞く。

「ほ、本当だよ魔美くん」

それでも魔美は疑い深く高畑のほうを見ている。

「それはそうとボールは誰が投げるの？」

高畑の問いに魔美は

「もちろん私よ、それとも私じゃ嫌？」

とムツとした表情で言った

「そういうじゃなくて、きみ野球やったことある？しかもピッチャーだよ？」

その言葉に魔美は

「大丈夫よ高畑さん、私のテレキネシスならど真ん中にいいボールが投げれると思うからたぶん心配ないわよ」

魔美は明るく言う。

「わかったよ、じゃあピッチャー・マウンドに行ってくれ」

高畑はそういつて打席に入る。

「オツケー」

魔美もそういつてピッチャー・マウンドにテレポートする。

魔美は片手を親指と人差し指と小指だけを立たせる形にした。

そして次の瞬間ボールが浮いたのだ。これが魔美お得意のテレキネシスである。

バットを構えながら少し大きい声で高畑は言った。

「こっちは準備オツケー、そっちはどう？」

「こっちも準備オツケー・・・よおしくわよー、えい！」

魔美はそういつてボールを投げた（投げたと言うより飛ばしたと言った方が正しい）

そして高畑はバットを振る体勢に入った。

しかし、

「スカ！」

高畑のバットが空を切った。

「そんな〜」

魔美が飛ばしたボールは丁度ど真ん中のストライクでスピードもそこまで出ていなかったはずだが、なんと高畑はその絶好球を空振りしてしまったのだ。

「ウフフフ、ダメねー高畑さんたら」

魔美ニヤニヤしながら言う。

「しょ、しょうがないさ、人間に失敗はつきものだもの」
高畑が慌てながら言う。

「そうよねーw人間、失敗は誰でもありますからねーw」
魔美はそう言っただけで高畑の方をニヤニヤしながら見ている。
ベンチで見えていたコンポコも腹を抱えて笑っている。

「もう、魔美くんもコンポコもひどいや」

高畑はそう言っただけで恥ずかしそうにしている。

そのとき魔美の脳内にビビビビビという音が聞こえた。

「あ！高畑さん非常ベルが。高畑さんはそこで待ってて私行ってこ
なきゃ！」

(非常ベルとは誰かが困っている時にその周波が魔美の脳内届いて
音となって聞こえる一種のテレパシーである)

恥ずかしくなっただけで赤くなっていた高畑だがそのことを聞いて目の色
が変わった。

「わかった魔美くん、気をつけるんだよ」

「うん！」

魔美はそう言っただけでどこかへテレポートしてしまった。

第一話「私はエスパー」(後書き)

えー魔美ばっかですみません。ついつい書きすぎてしまいました。
パーマンやドラえもんはあとあと出てくるので心配しないでください。
い。(ちなみに初投稿)
これからも応援ヨロです^^

第二話「雲の上での出会い」

「あれ〜？非常ベルはここら辺からしたんだけどなあ・・・」

魔美はベルが鳴った辺りを空から低空飛行で探していた。（テレキネシスで自分も飛ぶことが出来る）しかしそこには誰も居なく、ただ住宅街が並んでいた。しかし魔美が諦めようと上空に昇ったときである。

「ビビビビビビビ」

また魔美の脳内に非常ベルが鳴った。しかもさっきとは比べものにならないほど大きな音だ。

「もう〜困ってる人は何処にいるのお!？」

魔美はもう一回住宅街の辺りを探してみたが、やはりそこには誰も居なかった。しかも住宅街に降りた瞬間さっきまでのすごい音で鳴っていたベルがいきなり止んだのである。

「ホントにおかしいなあ、私の超能力もそろそろ限界なのかな？」

魔美がまた上空に戻ってみるとまたベルが鳴り始めた。

「まさか、空の上から助けを求めているんじゃ・・・？」

魔美の考えは的中した。上空にいけばいくほどベルが大きな音で鳴っているのである。

そして魔美が雲を突き破った時、なんと男の子の声がかすかに聞こえたのだ。

しかも魔美が男の子の声に近づくとつれてベルも大きく鳴ってきた。そしてついに男の子の声がハッキリと聞こえるようになったのだ。

「助けてー!! ドラえもんー!!」

「ドラえもん？」

魔美は少し困惑した。

「ドラえもんって何よ？」

訳が分からずその声を頼りにして近づくと眼鏡をかけた男の子が涙目になりながら雲の上に立っているのだ。

魔美は男の子に気づかれないうちにその雲に降りて背後から近づいた。

「それにしてもこの男の子はどうやってここまで来たのかしら……しかもこの雲なんで乗れるのかな……?」

魔美はまだ動揺しながらも、その男の子に話しかけた。

「ねえ君? どうしたの?」

男の子は急に声をかけられたので

「うわああああああああああああああ、おばけええええええええ!!」
と大きな声で叫んだ。

「おばけとは失礼ね! あなたが助けを呼んだから来たのに……」

「え? ぼ、僕助けなんか呼んだ?」

男の子が少し恐怖におびえながら言った。

魔美はごまかすようにして

「ううんなんでもない、こっちの話
と手を横に振った。

「それより君、なんて言う名前なの?」

「え、僕の名前? 僕の名前はのび太、野比のび太っていいます」

「へえー、のび太君って言うんだすてきな名前ね」

「そう言えばお姉さんの名前聞いていなかったけど……」

のび太はすこし照れながら言った。

「私?、私は佐倉魔美、魔美って呼んでね」

魔美は自分がここにやってきた目的を思い出し、のび太に質問した。

「そっういえばのび太くん、泣いていたけどどうしたの?」

のび太は

「言ってもたぶん信じてもらえないと思うよ」

といて向こうをむいてしまった。

「大丈夫信じるわ……、だから話して!」

のび太は少しためらったが今自分を心配してくれている魔美の表情を見て、

「魔美さんって不思議な人だねw」

と笑いながら言った。

「あーら、お互い様よw」

と魔美も笑いながら言った。

その明るいムードの中のび太が口を開いた。

「どこから話せばいいのかわかんないけど僕にはドラえもんって言う友達がいるんだ。そのドラえもんは22世紀から僕の悲惨な歴史を変えるためにきた未来の猫型ロボットなんだ。」

「へえー未来からね・・・」

あまりにも普通のコメントだったのでのび太は焦って

「ええええええ！？驚かないの？未来からやってきたんだよ！」

と言り返した。

「私は信じてるもののび太くんのこと。それよりそのドラえもんがどうしたの？」

のび太は不思議な気分になりながらも話を続けた。

「ドラえもんは四次元ポケットというポケットを持っていて中から未来の道具がいっぱい入っているんだ。けどドラえもんたらケチなんだ、夏休みの宿題がどっさりあるのに手伝ってもくれない。そしてドラえもんと僕はケンカしちゃって・・・」

「家出してきたのね？」

「そう、だからドラえもんが留守の際に四次元ポケットのスペアから雲固めガスとタケコプターを取り出して雲の上でのんびり昼寝していたんだ。」

「雲固めガス？タケコプター？」

魔美はちんぷんかんぷんな顔をしてのび太を見る。

「ああごめん、説明するの忘れてた。雲固めガスって言う道具はねそのガスを雲に吹き付けると雲が固まって、その上を自由に歩くことが出来るんだ」

「へえーだから私やのび太さんが上に乗っても落ちないわけね。」

「そう、そしてタケコプターっていう道具は頭につけると空を自由に飛べる事が出来るんだ」

「え、じゃあそのタケコプターで下に降りればいいじゃないの？」
魔美の問いにのび太は

「もちろん、そうやって下に降りるつもりだったんだ、だけどタケコプターの電池が雲に着いた途端切れちゃって・・・」

「それで泣きながらドラえもんのことを呼んでいたのね・・・」
のび太は赤くなりながら軽くうなずいた。

それからのは太は何かを思いだしたように魔美に質問した。

「そういえば魔美さんはどうやってここまで来たの？」

「え、私？えーとね・・・うーん・・・どうしよう・・・」

魔美は困った顔で考えた後、決心した。

「この事はあまり人に言わないでほしいの・・・約束できる？」

「そんなに大事な事なら人に言わないよ。約束する！！」

のび太はそう言って自分の胸をドンと叩いた。

「ありがとのは太さん。・・・あのね実は私エスパーなの・・・」

うつむきながら魔美は言った。

「エスパー？」

「そう、エスパー。テレキネシスやテレポーテーションなどの超能力が使えるのよ。」

エスパーと聞いてあまりピンとこないのは太に対して魔美は「実際にやって見せた方がいいわね」

と喋ってのは太の体を宙に浮かして見せた。

「うわあすごいなー体が宙に・・・」

のび太はびっくりして口がポカーンとなっている。

「ウフフフ、他にもテレパシーや透視もできるのよ」

「テレパシー？じゃあ魔美さんは僕の心の声を聞いて・・・」

「そうあなたを助けに来たの。さあ下に降りましょう」

そう喋って魔美は自分の体とのは太の体をテレキネシスで宙に浮かせ下の住宅街に降りていった・・・。

第二話「雲の上での出会い」（後書き）

えー2話目終わりました。疲れた……。今更ながら時代設定を紹介
します。ドラえもんは魔美とキテレツの時代が2008年でパーマ
ン、ハットリ、怪物くんの時代が2000年です。なぜこの時代設
定にしたかという点、最初ドラの時代設定はパーマンの2作目のア
ニメの初放映年が1983年なのでその時代プラス8年（ドラえも
んに大人のパー子が出ているので8年ぐらいたっているのではない
かと（適当））の1991と言う時代設定にしようと思ったのです
がそうすると後々出てくる悪役キャラが大人の都合で出せなくなる
ためドラは2008年パーマンは2000年という事にしました。
時代設定で不満がある方はごめんなさい。まだまだ青二才なので応
援よろしくです。

第三話「黒い影とパーマン」

「計画は順調ですか？魔土博士。」

「暗い研究室で黒い帽子と黒い服を身に纏った男が話しかけた。」

「ああ、この部品を取り付ければ完成だ・・・」

「魔土と呼ばれた老博士が暗い声で答える。」

「そうですね、それは良かったですなあ〜計画予定日が二日も早まりましたよ〜」

「黒い服を着た男は大きな口をにつこりさせながら言う。」

「そんなことより例の約束を忘れてないだろうな・・・？」

「魔土が心配そうに聞く。」

「はい、もちろん覚えていますよ。今から向かうところでございます」

「そう言うと男は自分持ってきたカバンからボールペンのようなもの取り出した。」

「それがお前の言っていたタイムホールペンか？」

「魔土が変な顔をしてたずねる。」

「はい、そうでございます。このペンでまず自分の体よりも大きな丸を壁や床に描いて、隣に行きたい場所、年号、時間を書きます・・・」

「そしてその描いた丸に体を入れるようにするとその行きたい時代に行くことが出来るのだな？」

「魔土が男の言葉を遮るように言う。」

「ま、そう言うことです。他にもいろいろありますが、見ますか？男がカバンをあさりながら言う。」

「いや、また今度にしてくれ・・・それよりも時間が惜しいのではないのか？」

「魔土があきれ顔で男の方を見る。」

「いや〜そうでしたそうでした。私としたことがついうっかり、い

「けませんなあw」

そう言うと男はタイムホールペンで壁に丸と場所、年号、時間を書き始めた。

「本当に奴は・・・いや、パーマンは来るのか!？」

魔士の突然の問いに男は

「はい、もちろん来ますとも。私は嘘をつきません。では・・・」
と言って穴の中に消えてしまった。

2000年8月16日

.....

「こっ暑いとパトロールも大変だよ・・・なあ?ブービー?」

「ウツキーウキヤキヤ・・・」

真夏日の中、青いマスクをかぶり、赤いマントを身につけた少年とオレンジ色のマスクをかぶり、水色のマントを身につけた猿が上空を飛んでいる。

彼らの名はパーマン。地球を守る正義のヒーローだ。

青いマスクの少年は地球上で初めてパーマンに任命されたパーマン1号である。

そしてその正体は須羽満夫。満夫はいたって普通の男の子であまり頭も良くなく力も弱い。

しかし彼には他の人には無い正義感があるのだ。その心が認められたのか(?)ひよんな事からバードマンにパーマンに任命されてしまった。そして彼のその隣にいる猿のパーマンはパーマン2号であ

る。彼も満夫と同じようにひよんな事からパーマンになった。主にみんなからはブービーと呼ばれている。彼らがかぶっているマスクはかぶると通常の六千六百倍の力がでる。そしてマントは時速119 Kmの速さで空を飛ぶことが出来るのだ。なので力の弱い満夫でもマスクとマントを身につければ一躍スーパーパーマンになることができる。(パーマンの正体は秘密であり、その正体がばれるとバードマンの変身銃でほかの動物に変えられてしまう)

そのときである。満夫とブービーの胸あたりにあるPの形をしたバッチがピピピピと甲高い音で鳴った。(このバッチは他のパーマンと連絡するための通信機の様な物。他には口にくわえると酸素ボンベの役割にもなる)

「はい・こちら1号・・・なんだ、パー子か・・・」

満夫のやる気の無い返事に対してパー子と呼ばれた女の子は

「まあ〜！なんだとは何よ！！もっとハッキリと返事できないの！？」

と怒り出した。彼女もパーマンでパーマン3号である。正体は人気アイドルスターの星野スミレである。しかしマスクをかぶった途端性格がお転婆になってしまう。(ただし彼女は他のパーマン仲間達に正体を秘密にしている)通称パー子。

「わ、わかったよ今度から気をつけるよ。それよりなんか事件が起きたんじゃないの？」

満夫が話を変えるように言う。

「そうそう、そうだったわね。」

パー子が思い出したように続けて言う。

「今東京湾にいるんだけど近くの貨物船が高波で転覆しそうなの。私一人じゃとてもじゃないけど持てそうにないわ。だから1号達にも手伝って欲しいの。」

「わかった。今からそっちにブービーと行くから君は船が沈まない様に下から船を支えていてくれ。」

「わかったわ！」

そう言うとパー子は無線を切った。

「よおし、ブービー、パータッチで急ごう！」（パータッチとはパーマン同士が手をつなぐと一人の時よりもスピードがでることを意味する。二人だと通常の2倍の速度、三人だと4倍、4人だと八倍にもなる。）

「ウツキウツキー」

そうやって満夫とブービーは東京湾に急いだ。

一方その頃パー子は10分以上も、下から船の後ろ部分を支えていた。

（そろそろ手が痛くなってきたわ・・・）

パー子はそう思いながらも懸命に船を支えているがだんだん手の感覚が無くなってきている。

（もう手が・・・早く一号！！・・・）

パー子が一瞬手を離そうとしたとき、二人のパーマンが海の中へ飛び込んできた。

「遅いわよ！一号！！ブービー！！」

パー子の大声が海の中に響いた。

「しかたないじゃないか、それでもパータッチしてきたんだぞ！」

満夫はそう言いながら船の前部分に移動する。

「いい？僕が前部分を一人で持つからパー子とブービーは後ろ部分を持つてくれ」

「わかったわ、でも一号一人で大丈夫？」

満夫の声にパー子が心配した声で言う。

「それでも僕は男の子なんだぜ！！バカにしないでくれよ」

「あら、そうでしたわねwごめんなさいw」

パー子がかからかいながら言う。

「なんか引つかかるなあ・・・まあ、いいや。それより早く船を港まで持っていくぞ！」

「わかったわ！」

「ウツキーw」

そう言うと三人は貨物船を持ち上げて近くの港へと足を急ぐのであった……。

第三話「黒い影とパーマン」(後書き)

3話目オワタ(^o^) 黒い男の正体はもう分かりますよね・・・
WWWそれよりもまだ感想が0件なので不満でもいいのですので
どしどし感想を送ってください。

第四話「消えたパーマン」

「ふう〜それにしてもつかれたな〜」

貨物船を無事港まで持っていった三人（正確には二人と一匹）は近くの灯台の上で一休みしていた。

「何よ、大して仕事してないくせに・・・私なんか手が痛いのも我慢して貨物船を支えていたんだから!!」

満夫の言葉にパー子が怒り出す。

「なんだい、僕だってこの頃パトロールや事件で大変だったんだぞ!!!」

満夫が反論気味で言う。

「へえ〜パトロールねえ〜・・・そのパトロールを三日間サボってた人は何処の誰かしら?・・・しかもその理由が夏休みの宿題ですって・・・ねえ、一号?^^」

パー子が勝ち誇った笑みを浮かべながら満夫の顔を見る。

「パー子、いや、パー子さん、このことはどうか、どうかバードマンには言わないでください〜」

焦った満夫がパー子に頼み込む。

「さあ〜?どうしよかな〜?・・・ねえ一号?クレープおごってくださる?」

パー子が甘えた声で言う。

「ちえ、わかったよおごります。おごればいんどしょ」

「そうと決まれば早く行きましょ、近くの商店街においしいクレープ屋さんがあるの」

パー子はそう言って足早に飛んでった。

満夫達はパー子の後に付いていく。

「なんだい!人の金だと思って・・・ホントにあいつ女なのか?」

満夫が飛びながら小さな声でつぶやく。

「アキヤウツキウイ」

「え、なにに？自分にもバナナおこれって？。冗談じゃない、誰がおこるもんか！！」

「ムツカ〜！！！」

ブービーが怒り出す。

「わかったよ。今度買ってあげるから……。今お小遣いが足りないんだ」

「ウイウイ」

「ったく、調子がいいんだから……。トホホ……」

「一号〜！！早くう〜！！」

先に商店街の上空に着いたパー子が満夫達をせかす。

「別に急ぐこと無いじゃないか。食べ物は逃げないんだぞ。」

「それが逃げるのよ。、その苺クレープは全国で三本の指に入るほど人気だから、早くしないと売り切れになっちゃうわ！！ほらあれを見なさい。」

パー子が指を指した先には40人ぐらいの行列が見える。

「え！！！！まさか、あれに並ぶの！？」

「当然でしょ、さあ早くならびましょ」

パー子が強引に満夫の手を引っ張る。

「わかったよ、ならばばいいいでしょ……」

満夫が渋々列にならぶ。

そして満夫達がならんでから10分ぐらいたった頃

「立っているだけって意外に疲れるわね……」

パー子がボソツと愚痴をこぼす。

「じゃあ諦める？」

満夫がうれしそうな顔で聞く。

「冗談でしょ！？ここで諦めたら女がすたるわよ！！！」

パー子が強い口調で反論する。

そのときである。

「キヤーーーー！！ひったくりよーーーー！！！」

突然女の人の悲鳴がが商店街中に響いた。

「おいパー子、ブービー、ひったくりだ、行くぞ!!」

「クレープ食べれないのは残念だけど仕方ないわ……。行きましょ!!」

「ウイウイ!!」

そう言うのと急いで三人は女の人の声がした場所へ向かう。

そこには20〜25歳ぐらいの女の人少し足を震わせながら立っていた。

「犯人はどこですか?」

満夫が女に問いかける。

「あいつです!!あの黒い男!!」

女が指をさした方向には黒い帽子をかぶり黒い服を着たいかにも怪しい男が慌てて走っている。

「あいつが犯人ね、まちなさーい!!」

パー子が一目散に黒い男を低空飛行で追いかける。

それを満夫とブービーが追いかけるようしてに飛んでいく。

やがて男が商店街の隣の小さい路地に逃げ込んだ。

「隠れようたってそうはいかないわよ!!ぜったい逃がさないんだから!!」

パー子が男を追うようにして路地に入ったが、なぜか男の姿は無かった。

「あれ、何処いったのかしらあの男……」

少しして満夫とブービーが路地に入ってきた。

「パー子、男は?」

「わからないわ……。消えちゃったみたい……」

「消えた!?そんなバカな!?ここは行き止まりなんだよ!!」

確かに満夫の言うとおり、この路地は行き止まりで奥には酒の瓶が何本か置いてあるだけであった。

「ホントに男はこの路地に入ったの?」

満夫がパー子にたずねる。

「ホントよ、確かに見たんだから!」

第四話「消えたパーマン」(後書き)

4話終わりました^^5話以降は少しペースが遅れますがあしからず。(今短編小説を書いているので)

まだ感想が0件・・・悲しい・・・(; ;)

第五話「新たな黒い影」

「ジリリリリリリリ！ジリリリリリリ！」

突然喪黒のカバンから音が鳴り出す。

「はいはい、今でますよ……」

喪黒はそう言うとう自分のカバンから昔懐かしい黒電話の形をした携帯電話を取り出した。（実はこの携帯はタイム電話で好きな時代の人たちと会話することができる。）

「どなたですかあ〜？」

喪黒が問うと携帯から少年の声が聞こえてきた。

「……喪黒さんですか……僕です」

「おや、その声は魔太郎くんじゃないですか。どうかしましたか？」

「いえ……大したことじゃ無いんですけど、いいお知らせを二つ。」

魔太郎と呼ばれた少年は、落ち着いた声で話を続ける。

「まず一つ目、怪物太郎とその一味が例の条件をのみこみ、我々の仲間になりました……」

「ほお〜それはそれは、まあ、例の条件が絡んでいますから……しかないですねえ……とここで、二つ目のお知らせはなんですか？」

「はい。二つ目のお知らせは……ついにあの服部を捕らえました……」

魔太郎は依然として落ち着いた声で話している。

「そうですかあ〜それは良かったです……彼は我々の計画をいろいろ探ってたようでしたから……助かりますなあ〜」

喪黒は口をニンマリとしている。

「そうですね……でもこれからは私たちの仲間になるでしょうね……あのお方のおかげで……とここで喪黒さんの方はどうでした？何か変わったこととかありますか？」

魔太郎が問いかける。

「私ですか？．．私は特に変わったことはありません．．．ただ．．」

「ただ．．．なんですか？」

「パーマンを未来に送ったのは少しまずかったのかもしれないねえ．．．」

「まずいつて何がですか？」

魔太郎が再び問いかける。

「さあ？私にもよくわかりません．．．ただなんとなく思っ
てしまったのです．．．」

喪黒が少し暗い声で話す。

「どうしたんですか？いつもの喪黒さんらしくありませんね。おっ
とそろそろ仕事の時間です。じゃあ喪黒さん切りますよ。」

そう言っつて魔太郎は電話を切った。

「私もそろそろ未来へ戻るとしますか．．．。それにしても私が
こんな事思っつようじゃもう私も年ですかね．．．．．なんちゃっ
てww．．．．．オーホッホホwwwwww」

そう言いながら喪黒は再びタイムホールの中にへと吸い込まれてい
くのであった．．．。

．．．．．

2008年8月16日（土曜日）「時間帯は魔美とのび太が会っ
ほんの少し前の時間」

「一号！一号！ねえ起きて！一号！！」
「ウツキヤ！ウツキヤ！」

二人（正確には一人と一匹）の声によって満夫は目を覚ました。
「うーん……あ、ブービー……パー子……そうだ！！喪黒は！？」

「さあ……わからないわ……。私が目を覚ました時にはもう喪黒の姿は見えなかったの……。」

「ふーん……。そうか……。ところでここはどこなんだい？」
一号がパー子に質問する。

「さつき一号が寝ている間にブービーと辺りの様子を探っておいたの。そしてどうやらここはどこかの町の裏山みたいなよ。近くに学校もあるし……。ここが日本だってことは間違いないわ」

「そっか……。ありがとうパー子。」

いつもよりも満夫が優しいのでパー子は少しビツクリして言った。

「どうしたの急に？頭でも打ったの？」

パー子のこの一言で喧嘩の火蓋が切って落とされた。

「なんだと！！僕を変人みたいに言うな！！！！だいたい君はいつも一言余計なんだよ……！！！！」

「なんですって人が心配してあげているのにその態度はなにによお！！！！だいたいあなただっていつもドジばかりで私が居ないと何も出来ないじゃない！！！！」

「なんだと！！パー子のオタンコナス！！！！！！」

「まあ！！なにによお！！一号のアンポンタン！！！！！！」

「パー子のブス！！！！！！」

「一号のドジ！！！！！！！！」

「アツキヤキヤバツキヤブツスー！！ウキヤキヤウツキーアキヤキヤウツキヤウイ！」

（訳：なんでいつもこんな事で喧嘩するんだよ！！そんなことよりもこの町がどこだか調べるのが先だろ！！）

黙ってこの光景を見ていたブービーがついにキレた。

「ブービー……。ごめんパー子、僕が悪かった……すこし言い過ぎたよ……。」

「私も少し言い過ぎたわ……ごめんなさい一号……。」

「バツキヤ……。」（訳：やれやれ……。）

ブービーが珍しく怒り出したのを見て満夫とパー子はどうにか仲直り出来たようだ。

「よおし、喧嘩も終わったことだしブービーの言うとおりこの町を調べてみようよ」

「そうね、もしかしたら喪黒の手がかりが見つかるかもしれないしね」

「ウイウイ」

三人はそう言うのと裏山から飛び立った。

「ねえ、一号？よく見ると、この町って私たちの町に似てると思わない？」

「商店街に裏山、銭湯や空き地……確かにそう言えばそうだね」
満夫が答える。

「でしょう？……何かあるのかしら……？」

「考えすぎなんじゃない？」

「そうかしら……？」

パー子が考えるなかブービーが満夫に話しかけてきた。

「ウツキームキヤウキヤキュキヤ？」

「え？なにになに？あの空き地にいる人たちに話を聞けばいいんじゃないかって？……そうだね、そうしようかwパー子は？」

「私も別にいいわよ」

「そう？、じゃあ早く聞きに行こう！」

そう言うのと三人は空き地の近くの道路に降りたのであった……。

第五話「新たな黒い影」（後書き）

五話おわりました（＾3＾）

この前短編小説を書くのでペースが遅れると書いたのですが・・・途中で面倒くさくなったのでやめましたw

それと感想が1件来ました。すごい嬉しかったです。（YUKAさんあります^^）

これからもいつも通り頑張って小説を書きたいと思うので応援よろです。（6月辺りからは受験勉強などで忙しくなるかも・・・）

第六話「空き地にて」

一方空き地では……

「ああ、暇だな。なんかいいことねえのかよスネオ！」
スネオと呼ばれたキツネ顔の少年は困った様子で言った。

「そ、そんな。急に振られても困るよジャイアン……」
「何でもいいからなんかしゃべれよ!!」

ジャイアンと呼ばれた体がでかくゴリラ顔の少年は乱暴な様子で言った。

「わ、わかったよ。……じゃあ僕が星野スミレのサインをもらった事でも話すよ」

「あら、スネオさん、その話さつきもしなかったかしら?……」
スネオが話そうとしたとき隣の女の子が質問する。

「そういえば静香ちゃんのいうとおりだな……おい!スネオ!!
他の話にしる!!」

「そんな、ひどいよ。ジャイアン」

「そうよ、武さん。暑いからってあんまり無理なこと言っちゃかわいそうよ」

静香と呼ばれた女の子がスネオをかばうように言う。

「まあ、静香ちゃんがいうならしかたねえけどよ……」
ジャイアンが土管の上に座りながら言う。

なぜ三人がこんな暑い日に空き地にいるかというと、スネオは家の改装工事で、静香は大事なお客さんが家にきていて、ジャイアンは妹のジャイ子がマンガ同人を書いているため、三人は家を追い出されたのである。そこで三人はのび太の家で遊ぶことにしたのだが、のび太、ドラえもんはおろかのび太のパパとママまで家にいなかったのである。そこで仕方ないので三人は空き地で油を売っていたのである。

「それにしても今日はホントに暑いわね……」

静香がボソツとつぶやいた瞬間マスクをかぶった少年、少女、猿が空地地に入ってきた。

「あのすいません。聞きたいことがあるんですけど・・・」
青いマスクをかぶった少年、パーマン一号が静香達に近づきながら尋ねる。

「ハイ。なんででしょうか？」

静香は不思議そうな顔をして言う。

「ここは何処ですか・・・？」

満夫（一号）の問いに静香達三人は変な顔をする。

「バカねえ、直球すぎるわよ。」

隣にいるパー子が一号の頭をポカッと叩きながら話を続けた。

「あ、この町の名前はなんて言うのかしら？」

「はい、この町は月見台って言います。」

パー子の問いに静香が答える。

「月見台・・・聞いたことないや。パー子は？」

「私も知らないわ」

「アキヤウキキウキヤムキヤ・・・」（訳：僕もわかんない・・・）

「そうか、ブービーも知らないか・・・」

満夫が少し暗い表情をみせる。

「ところで君たちはなんて言う名前なんですか？」

満夫達三人が困っている中スネオが話しかける。

「へ！？僕たちですか・・・？」

満夫は驚いた顔で静香達を見る。

「今どき、私たちが知らないって、珍しい人たちね・・・」

パー子が満夫の耳元でささやくように言う。

「僕たちは地球の平和と正義を守るパーマンです！」

満夫が胸をドンと叩く。

「ああ？パーマン！？なんだそりゃ？」

「へコー！...！」

ジャイアンの一言に満夫達三人はずっこけてしまった。

「えええええ！？パーマンだよ！！パーマン！！！！知らないの？君たち？」

満夫が少し声を荒げて言う。

「スーパーマンなら知っているけど・・・？」

スネオはそう言うのとジャイアンの方を見た。

「それはそうと正義の味方なのになんで猿がいるんだw？」

「ムツカ〜！！！！（怒）」

ブービーがジャイアンに殴りかかるうとする。

「ほう、俺様と喧嘩する気か？・・・おもしれえ・・・やってやるうじゃん！！！」

「やめなさいよ、武さん！！！」

「そっだよジャイアン〜」

ブービーに殴りかかるうとするジャイアンに二人が体を必死に押さえつける。

「やめろよ、ブービー！！！」

「そうよ、こんなところで喧嘩している場合じゃないでしょ！！！」

ジャイアンに殴りかかるうとしているブービーを満夫とパー子が押さえつける。

「ムキ！！ムキキキアキキブツスー」（訳：フン！！今回は許してやる）

「ふん！！お前なんかいつでもギタギタ出来るからな。今回は許してやる」

どうやら喧嘩は治まったようだ。

「やあ、みんな、何やってるの？」

突然空き地の入り口から声がした。満夫達が振り向くと、そこには青くて丸っこい狸らしき人物が立っていた。

「あら、ドラちゃんじゃない。どうしたの？」

「そっだよ、ドラえもん。のび太の家に誰も居なかったから心配しちゃったよ」

静香とスネオが嬉しそうな表情で言う。

「ドラえもん？」

「ムキヤ〜？」

満夫とブービーは首をかしげる。

「ごめんごめん、実はパパとママが慰安旅行に出かけているんだよ。だから家には誰も居なかったんだ。そういえばこの人達は誰だい？」
ドラえもんが不思議そうな顔をして問いかける。

「僕たちは正義の味方、パーマンです。んで、僕が一号。この猿はパーマン二号、そしてこいつがパーマン三号。通称お転婆パー子。」

「お転婆は余計よ！！・・・初めましてパー子です」

パー子が満夫につっこみをいれながら言う。

「初めまして、僕ドラえもんです」

ドラえもんが軽くお辞儀する。

「そういえば、ドラえもん。のび太はどうしたんだ？」

ジャイアンが思い出したように尋ねる。

「そうだった、そうだった。ねえのび太君見なかった？」

ドラえもんが思い出したように慌てる。

「のび太さんがどうかしたの？」

静香が心配そうな顔をしながら言う。

「実は・・・のび太君家出しちゃったんだ・・・」

「家出！？」

静香とスネオが同時に声を上げる。

「なんだよ・・・家出かよ。どうせのび太の事だからすぐ帰ってくるだろ！？」

ジャイアンの問いにドラえもんがうつむきながら話します。

「僕も最初そう思ったんだ・・・でも押入にあったスペアポケットが出しっぱなしになっていたんだ・・・きつとのび太君、僕の道具を使って何処かへ行ったんだと思う。ああ、のび太君にもしもの事があったら僕どうしよう・・・。」
ドラえもんが少し暗い声で話す。

「なんなら僕達も手伝いましょうか？」

隣で見ていた満夫が言う。

「え？・・・君たちがかい？」

ドラえもんがキョトンした顔で話す。

「はい、こう見えても僕たちは正義のヒーローです。きっとのび太君を捜して見せます・・・。なあ？ブービー、パー子？」

「ウツキー！」（訳：オツケー！）

「ええ、いいわよ。」

ブービーとパー子も賛成した。

「そうだな、俺達も探そうぜ！！なあスネオ？」

「うん！そうだねジャイアン」

「私も探すの手伝うわ！！」

静香達ももちろん大賛成である。

「みんな・・・ありがとう。」

ドラえもんが暗かった表情を変えて嬉しそうな顔になる。

「そうと決まれば早く探しましょ。のび太君の特徴は？」

パー子がせかさうにして言う。

「のび太は黄色い服に紺の短パンを履いていて、眼鏡かけているぜ」

「わかったわ、じゃあ行くわよ一号、ブービー！！」

「あつ！？あれ見て！！！！」

パー子達三人がマントで飛び立とうとした瞬間スネオが大声で空を指をさす。

「あれのび太じゃない？ほらあそこ！！」

スネオが指さした方を見ると、のび太と赤毛の女の子がなんと空を飛んでいるのである。

「あの子がのび太君ですね。よおし！パワッチー！！」

そう言うと満夫はいきよいく空に飛び出した。

「一号待つてよ、私達は？」

「パー子とブービーはそこでドラえもんさん達と待つてくれ。僕は一人で行って来るよ。」

「でも一号ドジだから・・・」
。 パー子がそこまで言いかけた瞬間もう満夫の姿は見えなかった・・・

第六話「空き地にて」(後書き)

えー、六話終わりました^^少し怠けていたのでうp遅れました。
ごめんなさい><

この頃アニメのパーマン見てて気づいたのですが、満夫が人前で二
号に「ブービー」って呼んでいるんですよ。正体ばれないのでしょ
うかw疑問に思いましたw

あと感想を不満でも何でもいいので書き込んでいただくと嬉しいで
す(^o^)

第七話「真夏の鬼じっし」

一方のび太達二人はドラえもんを捜すために魔美のテレキネシスの力で空を飛んでいた。

「ねえのび太くん、他にドラえもんが行きそうな場所って何処かしら？」

真夏の太陽が照りつける中、魔美がのび太に尋ねる。

「うーん・・・いつもならミイちゃんの家屋根か、どら屋の前にいるんだけど・・・。」（ミイちゃんとはドラえもんが好きな猫どら屋はドラえもん行きつけのどら焼き屋である）

「そうだ！！まだ行っていない所があったんだ！！」
のび太が思い出したように言う。

「それでそこは何処なのかしら？」
魔美が再び尋ねる。

「うん、あっちの方にあるから僕が案内するよ」
のび太は今いる場所の逆の方角を指さして言った。

「じゃあ、早くいきましょ。ドラえもんがいるかもしれないわ。」
そう言つて魔美がのび太の方に振り向いた瞬間後ろから追ってくる影が見えた。

「待て〜！！！」

よく見るとその影はマスクとマントを身につけているパーマン一号、満夫であった。

「あれ何かしらのび太くん？」

魔美が指さす方を見てのび太が振り向く。

「うわ〜なんだあれ!？」

「こつちにくるわ!!!」

満夫が猛スピードでこちらに近づいてきたのにビックリして魔美はのび太を連れて全速力で飛行を開始する。そして真夏の空での追いかけてこが始まって10分、徐々に魔美達と満夫の距離が縮まって

きた。

「もう何なのよあの子いつまで追ってくるのよ。．．．それにしてもこのままじゃ、追いつかれてしまう。．．どうしよう。．．そうだ!!。ねえ、のび太くん!私の体につかまってくれないかしら!?!」

「え!?魔美さんの体にですか!?!」

突然魔美が変なことを言い出したのでのび太は赤くなってしまった。

「そうよ、私にいい考えがあるの。だから早く私につかまって!」

「わかりました。．．じゃあ。．。」

赤くなりながらものび太は魔美の腰のあたりにつかまる。

「ねえー君!!のび太くんだよねー!!?」

距離が縮まる中、満夫が大きな声で確かめるが二人には聞こえていない。

「しっかりつかまった?よし!行くわよ!!テレポート!!」

そう言うと魔美は自分にむかってピースを飛ばし他の場所へとテレポートした。

その後満夫が魔美とのび太がいた場所に着いた。

「あれ!?おかしいな。．．?確かにのび太くんみたいな子と赤毛の女の子がいたんだけどなあ。．．?消えたみたいだったよな。．．?まさかお化け。．．。」

この光景を見た満夫は恐怖で声が出なくなってしまった。

「と、とりあえず、一旦、パ、パー子達がいる空き地にも、戻ろう。．．。」

そう言うと満夫は足をガクガクさせながら空き地に飛んでいった。

その頃空き地では。．．

「それにしてもものび太の奴あんなところで何やってやがったんだ?」
「ジャイアンがイライラした顔で言う。」

「それよりもあの赤毛の女の子はいつたい誰なんだろう?」

「ドラえもんが不思議そうな顔をして考える。」

「ウキキウキキムツキヤアキキキウイ?」

「え？新車の誘拐犯じゃないかって・・・？そうかしら？」

ブービーの問いにパー子が答える。

「それにしてもパーマンて空が飛べるんだね」

スネオがボソツと言う。

「当たり前じゃない。パーマンですもの・・・。本当にあなた達パーマン知らないの？」

パー子が不思議そうな顔をして問いかける。

「知らないも何も、聞いたこと無いわ・・・。ねえ？ドラちゃん？
静香が顔をドラえもんに向ける。

「うーん、パーマン・・・。僕も聞いたことないや。」

ドラえもんは腕組みをして考える。

「だいいち、そんなマスクかぶった猿なんか見たこと無いぞw」

「ムキヤアー！！」

ジャイアンの一言でまたブービーが怒り出す。

「まあまあ、ブービー落ち着きなさいって・・・。」

パー子がなだめるように言う。

「パーマンを知らないと言うことは私たちの能力も知らないのよね？」

「能力？」

スネオが首をかしげる。

「そう、空を飛ぶこと以外のね」

そう言うとパー子はブービーの足の下にある直径4cmぐらいの石を手に取り、親指と人差し指ではさむようにして持つ。

「それをどうするんですか？」

静香が不思議そうな顔をしながら尋ねる。

「まあ見てらっしゃい」

パー子が軽く指に力を入れた次の瞬間。なんとの人差し指と親指にはさんであつた石は四方八方に飛ぶようにして木っ端みじんに砕け散ってしまった。

「ねえすごいでしょ！このマスクを被るとね力が通常の6600倍

になるのよ」

「・・・・・・・・・・」

もちろんそれを見ていたドラえもん達はあ然としている。

「すごい・・・怪力女だ・・・」

スネオがパー子には聞こえないような小さな声で言った。

「あら、なんか言ったかしら？」

パー子がスネオの方をチラリと見る。

「な、なんでもないです」

スネオは慌てて両手で口をふさぐ。

「おい・・・もしかしてその猿も力が強いのか・・・？」

ジャイアンがおそろおそろパー子に尋ねる。

「ええ、そうよ、ブービーもパーマンだから力は私とあまり変わらないのよ^^」

パー子がニコニコしながら言う。

「ジャイアン、喧嘩しなくてよかったね・・・」

スネオがジャイアンにこっそりと耳打ちする。

「ああ・・・そうだな・・・もし、一発でも殴られてたとしたら・・・。寒気がしてきたぜ・・・」

ジャイアンは少し震えた声で答える。

「そついえば一号さん遅いですね・・・」

静香が心配そうな顔をして言う。

「そついえばそつね・・・。ドジな一号の事だから、もしかしたら何かあったのかもしれない・・・。少し心配になってきたわ・・・。様子見に行きましょうブービー」

「ウイウイウキヤ」

パー子とブービーがそう言って飛ぼうとした瞬間、ピュコンという音とともに眼鏡をかけた男の子と赤毛で中学生くらいの女の子が急に空き地のど真ん中に現れた・・・。

第七話「真夏の鬼ごっこ」（後書き）

えーwすごい遅れてごめんなさい。風邪や期末テストの勉強やらでいろいろ忙しかったものですから、なかなか書けませんでした。やっぱり6月は修学旅行やテストなどでうpするのが難しいと思いますが、頑張りたいです。まだ感想一件だけ……。寂しい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1722e/>

藤子ストーリーズ

2010年11月13日11時30分発行